

# 豊郷町の今と 向き合う若者たち

「愛する豊郷を元気にしたい」

NPO法人とよさとまちづくり委員会の活動に合流する形で、滋賀県立大学環境建築デザイン学科の学生が立ち上がったから16年。

当初、10人にも満たなかったメンバーは100人を超え、学生による組織的な運営はますます広がりをみせている。

現在改修が進む豊郷町の空き家を訪ねた。

空き家問題の解決をめざし  
16年にわたり活動を継続

県内最小の地方自治体である豊郷町。今年5月の時点で、人口7364人、3006世帯が暮らす。国道8号沿いの一部を除いて、ほとんどの地域に田園が広がっている。

「あの家も空き家で、その角にある倉庫も今は使われていません。本当に空き家が多いんです」と指さし教えてくれたのは、とよさと快蔵プロジェクトの16代目代表を務める

萩原咲楽さん。まちを5分ほど歩くと見つけた空き家は、それほど築年が経っているように思えない家ばかりで、多くが昭和の中〜後期のものだろう。ただし、人が住まなくなつた家は朽ちていくのも早い。

さかのぼること20数年前、地域の課題に正面から向き合ったのが、とよさとまちづくり委員会だ。酒蔵、大工、水道設備工などの若手有志が中心となり、空き家問題の解決や地域の交流に取り組んだ。平成12年にNPO法人となり、翌年には酒蔵・

代表を務めた廣瀬奈々さん。少子高齢化が進む豊郷町において、学生の参加は大きな活気をもたらしている。

平成18年から続くタルタルガでは、いままも学生手づくりの Pasta やドリンクが提供される。お盆はとくに書き入れ時で、今年も多くの近隣住民が訪れた。「タルタルガ部門は、料理好きなメンバーがシフト制で運営しています。収益は活動費に充てますから、貴重な収入源なんです」と続けた。

第二の故郷・豊郷町の未来を  
若者たちが変えていく

豊郷町高野瀬の空き家では、今年も合宿による大規模改修が進んでいる。8月末から9月中旬までの短期

「なによりも豊郷の人が好き」という思いだ。改修の技術指導や予算管

理にあたるNPO法人とよさとまちづくり委員会のメンバーをはじめ、地域のひととの関わりを経て、卒業する頃には身も心も豊郷に染まる。卒業生のうち数人は近隣で就職し、豊郷町に暮らしているという。NPO法人とよさとまちづくり委員会の前田広幸さんは、「僕たちの活動には後継者がいませんでした。本来、豊郷に関わりたくない学生たちが、地域に愛情をもつてくれる。これからは豊郷に残ってくれる子が出てくれたらありがたいですね」と期待を寄せる。

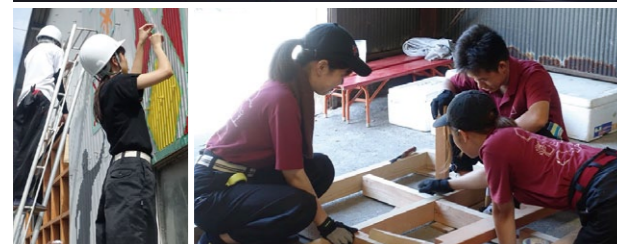
「私たちにとっては、ここが第二の故郷です。実際、地元より豊郷のほうが好きなほど。卒業しても何らかの形で関わりたい」と萩原さんはほほ笑んだ。



今年度の改修物件である豊郷町高野瀬の空き家。110人が参加して短期間で改修を終える



宮川倉庫



昨年度に改修した宮川倉庫。外からの見え方にもこだわり、開口部や外壁のデザインをメンバーで協力しながら作り上げた



タルタルガ

現在も毎週土曜に営業しているBarタルタルガ。地域の人々と学生との交流の場所にもなっている



ミツマルシェ

ワークショップ

上)今年4月のワークショップ。宮川倉庫の中で、豊郷町の子どもたちと一緒に木材でネームプレートを作った 下)昨年の秋に開催したミツマルシェ。消しゴムはんこのワークショップでは、たくさんの子どもたちが消しゴムはんこで飾りつけたオリジナル巾着を作った



コンペティション

改修案を決定する最終コンペティションの様子。現役メンバーをはじめ、プロジェクトのOBOGや豊郷町の住民も参加した



昨年9月に15周年を迎えた、とよさと快蔵プロジェクト。OBOGも参加した記念イベントでは、プロジェクトの未来について考えた



とよさと快蔵プロジェクト  
16代目代表  
福元美希さん



とよさと快蔵プロジェクト  
16代目代表  
萩原咲楽さん



とよさと快蔵プロジェクト  
12代目代表  
廣瀬奈々さん